
ディア・スプートニク

如月さつめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディア・スプートニク

【Nコード】

N7164Y

【作者名】

如月さつめ

【あらすじ】

pixivとの重複投稿。部活の三題嚆用に書いたもの。お題は「SF」「蛍」「時計」でした

01.

「ねえねえ、お兄ちゃん」

「なんだい？」

「地球って何色なの？」

「青、だよ」

僕はつい最近読んだ科学雑誌の記事を思い出しながら答える。

「青色なんだ」

妹は嬉しそうにふふつと笑う。その表情がとてもかわいらしくて、愛おしかった。

「もし宇宙飛行士になったらさ、お兄ちゃん」

「ん？」

「写真絶対に撮って来てね」

「そうだね」

約束だよ、と妹は言って小指を差し出す。僕は妹の小指に自分の小指を絡めた。

ゆびきりげんまん。うそついたら、

02.

数年前に起きたツングースカの大爆発のせいで僕は家族を失った。原因不明の爆発だった。数十キロにも渡って被害は広がり、そのぎりぎりの所に僕の家があった。

奇しくもその日は宇宙飛行士養成学校の合格発表の日で、僕は結果を見に一人で首都に出かけていたのだ。

もう死んでもいいとさえ思った。独りでこの国で生きて行くことなんて到底不可能だと思っていた。

けれども妹との約束があったから、それだけが支えだった。

やがて養成学校でクドリヤフカとリサという二人の少女に出会った。

一人では無理だけど三人だったらこの国でも生きていくことができる。そんな不確かな確信をあの頃の僕は感じていた。

「――失礼しました」

上司の部屋から出てくると、目の前にリサとクドがいた。

「ねえねえ、なにを話していたの？」

「落ち着きなつて、ほら、プシヨークも困ってるよ？」

興味津々に聞いてくるリサと、それを制するクド。けれどもクドの瞳はきらきらと何かを期待するかのようにこちらを見つめている。僕はもつたいぶるようにして、ゆっくりと口を開いた。

「今度の、有人実験のテストパイロットに選ばれた」

人類初の有人飛行実験。光栄にも僕はそのパイロットに選ばれた。これでやつと妹との約束を果たせる。

「ちよつと、すごいじゃん!!」

「ね!プシヨークすごい!すごい!」

二人ともまるで自分のことのように喜んでいる。なんだか照れくさい。

「実験は明後日だつて」

「…なんか急だね」

「きつと情報を外部に漏らしたくなかったからだよ」

ふーん、と少しだけ不審気にリサは頷く。

「…ならいいけどさ。ま、とりあえずおめでとう。失敗したら許さないからね」

僕の背中をばんつと強く叩くと、リサはお祝いの準備だ!と叫びながらどこかへ走り去って行った。

「リサってば…」

少しだけ呆れ気味に僕とクドは笑う。

「でも、おめでとう。これでやつと、妹さんとの約束が果たせる

ね」

「そうだね」

「プシヨークが人類初の有人飛行かー。嬉しいけどちょっとだけ悔しいかも」

少しだけ拗ねたようにクドは言う。まるで子供みたいだ。

「ねえ、プシヨーク」

「ん？」

「がんばって、ね」

ふわりと優しいげにクドは笑った。

実験当日。

僕は白い宇宙服を着こんで一人コックピットで準備が終わるのを待っていた。

手にはカメラ。知り合いの広報担当に無理を言っ借りに来たものだ。

緊張でカメラを持っている手がかたかたと震えている。

——大丈夫。

自身にそう言い聞かせる。

なんたって、もうすぐ夢を叶えられるんだから。

脇に付いている小さな窓から外を見ると、小さくクドとリサの姿が見えた。

二人もこちらに気がついたらしく、ぶんぶん大きく手を振って来る。僕も小さく振り返した。

唐突にサイレンが鳴り響く。準備完了の合図だ。

ノイズ交じりの管制室からの無線が、発射1分前ということを伝えてくる。

もうすぐだから。もうすぐ、僕は約束を果たせる。

発射まで3、2、1、0

僕は光に包まれた。まぶしい、太陽のような光。何も感じる暇もなく、僕はその光に飲み込まれそのまま意識を失った。

それは些細なミスだった。けれどそれはドミノ倒しのように次のミスを引き起こし、結果的に僕は宇宙飛行士という輝かしい一時の夢を見るのと引き換えに、右足の自由を失ったのだった。

自分勝手な人々はかの国との競争のために、子供たちの輝かしい未来を奪うのかと勝手に解釈して勝手に怒り狂っていた。

そんなじゃないのに、僕は本当に宇宙に行きたかったのに。いや、僕たちは本当に宇宙に恋焦がれていて、行きたいだけなのに。行き場のない怒りが、ふつふつと身体の底から湧いてくる。

「君の代わりに、クドリヤフカが宇宙へと行くことになったよ」
退院して、久しぶりに研究所に行くと僕の上司は淡々とそのようなことを述べた。

「そう、ですか」

予想は出来ていたことだったので、さほどショックではなかった。右足の動かない僕はここにいる価値などないのだ。別にそれはここだけの話ではない。この国では、国にとって有益をもたらさない者は価値がないのだ。

「君はこれからどうするかね？ 私たちは宇宙飛行士としてだけではなく、研究者としても君を高く評価している。君さえよければ今度は研究者として、宇宙開発に貢献して欲しい」

それは想像もしてなかった言葉だった。僕のことを上司がそこまで高く評価しているなんて意外だった。

「…少しだけ、考えさせて下さい」

動揺していて口から出たのはそれだけだった。

「ああ、ゆっくり考えたまえ」

「…失礼します」

上司に頭を下げ、僕は部屋を出た。

久しぶりの研究所は普段と何ら変わりはなかった。

むしろ二回目の有人飛行は絶対に失敗できないというプレッシャーのせいかな、研究所の中は焦りに包まれていた。

研究員の人たちは廊下で僕とすれ違うと、少しだけぎこちなく挨拶をした後、急ぎ足で自分の研究場所へと向かって行く。

今は僕のことよりもクドのことが大事なんだな、と自分で思っただけ悲しくなった。

しばらく廊下を歩いて、クドやりサたちがいるであろう場所の前で少しだけ立ち止まった後、なんとなく今は合わない方がいいような気がしてそのまま寮へと戻った。

動かない右足を無理やり引きずりながら僕は展望台へと続く階段を上る。

明日、発射する前にもう一度だけロケットを見ておきたかった。

こんな身体になっても、まだ僕は宇宙飛行士になるという夢を捨てきれないらしい。

でも本当は宇宙飛行士じゃなくてもなんでもいいのかもしれない。ツングースカの大爆発で家族を失い、生きる希望を失くしかけた僕が妹と約束したというだけですがつていただけかもしれない。家族との繋がりがなくなってしまうぬように。

そして何より妹との約束だけが僕の生きる理由だった。

そう考えるとあの事故は天罰だったのかもしれない。

他人にすがって生きようとしていた僕への。

長い時間をかけて階段を登り切ると、開けた場所にでた。展望台だ。ここからでもロケットはよく見える。

暗闇の中、目を凝らすと人影が見えた。どうやら先客がいたらしい。それも見覚えのある姿だった。

「…クド？」

「プシヨーク？」

クドは一瞬だけ驚いたような表情をした後、いつものように優しげに微笑んだ。

「久しぶり、だね。あの事件以来だね」

「うん」

少しだけぎこちない会話。クドはきつと僕の代わりに宇宙へ行くことに負い目を感じているのだろう。

「…ごめんね。プシヨーク。私、」

「いいんだ」

僕は無理やりクドの言葉を遮った。別にクドが負い目を感じる必要なんてどこにもない。

「でも、」

「別にクドは悪くない。いや誰も悪くないんだ。ただちょっと運がなかっただけさ」

僕がそう言って笑うと、ぎこちないもののクドも少しだけ笑った。

「…元氣そうでよかった。リサも心配してたよ」

「そっか」

少しだけ嬉しかった。心配される自分がいて、心配してくれる人がいることが。

「私ね、怖い」

「クド？」

急にクドはそうぽつりと言った。

「最初はさ、宇宙に行けるならなにがあっただってかまわないと思ってたの。たとえ自分の命とひきかえでも」

でも、とクドは俯きがちに言う。

「本当に自分勝手だと思うけど、プシヨークが事故にあった時に怖くなったんだ。私も一歩間違ったらああなるのになって」

「怖いのはみんな同じさ」

みんな仮面を被って、怖くないふりをしているだけだ。

「プシヨークも？」

「僕は…どうだろうね」

僕は正直死んでもいいと思っていた。

そうすれば家族とまた会えるから。

ここに来たてのころは本当に心の底からそう思っていた。

でもクドやりサと出会って少しだけ死ぬことが怖くなった。死ん

だらもう二人に会えないと思うと。

「…でも事故にあった時、悲しかった」

「どうして？」

「妹との約束が守れなくて」

「プシヨークは優しいんだね。私なんて自分の事しか考えてない
つてのに」

夜風が優しく僕たちの頬を撫でた。静かな夜だ。

「ねえ、約束しよ」

「約束？」

うん、とクドは頷いた。

「無事に帰って来れたら三人で螢を見に行こうよ」

「蛸つて…もつと南の方の国じゃないと見られないよ」

「何年かかってもいいの。いつか三人で見に行こうよ」

ここは寒すぎるから、もつと暖かな国へ行こうとクドは言う。

「…そうだね」

「じゃ、約束ね」

クドは小指を差し出してくる。僕はその小指に自身の小指を絡める。

「「ゆびきりげんまん、うそついたらはりせんぼんのーます」」

ゆびきった、とそれを合図に絡めていた小指を離す。

クドの姿が少しだけ妹の姿と被った。

今度こそ僕は約束を果たすことができるだろうか。

「もつ、行かなくちゃ」

時計を見ながらクドが言う。時計の針は十一時を指していた。

「そうだね」

僕が頷くと、クドはいつかのようにふわり優しくに笑って、

「プシヨーク、私、がんばるから」

そう言って、軽やかな足取りで森の中へと消えていった。それが
クドを見た最後の瞬間だった。

結局クドは僕とリサの元へは帰ってこなかった。

打ち上げは無事成功した。けれど機体の破損により彼女と彼女の乗っていたスプートニクは宇宙で燃え尽きたのだ。

僕も失敗、クドも失敗、そうすると残ったのはリサだった。

打ち上げは一週間後。上司はリサにそう告げた。

リサは余命一週間ってことだなと笑っていたが、僕は笑えなかった。

あの時のように僕は展望台にいた。今度はあの時と違って誰もいない。

明日が三回目の有人飛行実験だ。

失敗しても、成功してもこれが最後の飛行実験。少なくとも僕たち三人の中では。

「やあ」

唐突に後ろから声がかかる。振り向くとそこにはリサがいた。

「君は、行くのかい？」

「ああ」

リサは短く答えた。

「プシヨークだって、もし私の立場だったら行くだろう？」

「まあね」

僕は、いや僕たちは宇宙へ行くためだけに生きていると言っても過言ではない。

それほど宇宙に憧れて、恋焦がれていた。

「あたしさ」

ぼつりとリサが呟いた。

「ここに帰って来ない気がするんだ」

「どういうこと？」

「そのまんまの意味さ。なんとなくそんな予感がするんだ」
宇宙飛行士の予感だとリサは笑って言う。

「だからさ。これ、貰ってくれないかな」

そう言って渡してきたのは懐中時計だった。いつもリサが使って

いた物だ。

「これ、大切な物なんじゃ…」

「いいよ。形見つてことで」

よく見ると表に何かが彫つてある。

「これつて…」

そこには僕たちが出会った日の日付が彫つてあつた。

「あたしらしくないって思うだろ？」

でもさ、トリサは続ける。

「やっぱりあの日は忘れられないんだよな…」

宇宙養成学校に合格していたのは僕とクドとトリサの三人だけだつた。

初めて三人が出会つた時、緊張している僕とクドに向かってトリサは笑いながらこう言つたのだ。

『あたしたちさ、家族みたいになれるといいな』

偶然にもクドにもトリサにも家族と呼べるような人はいなかった。だから気を利かせてそんな事を言つたのかもしれない。

でも僕たちはその言葉に大きく頷いて、つられて笑つた。

「ま、もし無事に帰ってきたら返してくれたらいいさ」

あの頃のようにトリサは笑つて言う。

「それとさ、あたしがもし帰つて来れなくてもクドとの約束だけは守つて欲しいんだ」

「なんでそれをトリサが？」

あの約束のことはトリサは知らないはずだ。

「クドが出発前に教えてくれたんだ」

「そう、なんだ」

「だからどんなに時間がかかっても守つて欲しい」
深々と頭を下げながらトリサは言う。

「…うん」

僕の返事を聞くと、トリサは頭を上げて笑つた。
ありがとう、と。

そして僕だけが生き残った。

03 .

——蒸し暑い。

虫達の大合唱が聞こえる中、僕は森の中を歩いていった。手には懐中電灯。足元を照らしていると、その光にまるで吸い寄せられるように蛾や羽虫たちが舞いこんでくる。

空を見上げると、懐中電灯なんていらんんじゃないかと思うくらい満天の星空。あの国では見ることができないサウザンクロスもここでは輝いている。

あれからもう数十年も経って、かの国の宇宙飛行士が月に辿り着いたり、世界では様々なことがあった。もちろん、僕自身にも。

今までなるべくクドとリサのことを思い出さないように生きて来た。

でも、もうそれは今日で終わりにしよう。

約束を果たしに行くんだ。

クドと、そしてリサとした約束を。

今度こそきちんと約束を果たそう。

長い時間かけて森の中を歩くと、開けた場所にでた。

川が近くにあるのか微かに水の音が聞こえてくる。

僕は手に持っている懐中電灯のスイッチを切ってそのまま静かに待つ。

唐突に目の前に光が走る。淡い、弱々しい光。今にも消えそうなその光はひとつ、またひとつと増えていく。綺麗だ。

「約束、守ったよ」

随分と遠回りをしてしまったけれど。空の方を向いて僕は言った。そこにはあの頃となにも変わらない星空があった。

この宇宙のどこかにいる彼女たちそして妹に想いを馳せながら、

僕はそつと涙を流した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7164y/>

ディア・スプートニク

2011年11月21日12時41分発行